

仏教再生としての  
般若心経。  
Ver. VII。

空不動。

2016/11/ 4 更新。

## はじめに

仏陀 入滅後 仏教の混乱の中から 仏陀の悟りを継承する人達により 仏教再生を目的として大乘仏教が興りました。大乘仏教では これまでには無かった普遍的な世界観が構築され 【空】を中心とする思想体系が生み出されたのです。

従って般若心経を従来の仏教の範囲で解釈しようとする 意味のある有効な世界観が構築できず 解釈がたちまち破綻してしまうのです。

それ故に 世に有るすべての般若心経の解釈書には 世界観と言えほどのモノはなく 全体像があやふやで 内容が矛盾に満ちており 読者を心底納得させるものは皆無と言えます。

それであっても 般若心経は二千年間 「意味不明」のまま 歴史の中に生き続けてきたのです。

ここに著者が自らの修行体験と 現代の論理的思考を駆使して これを読み解いてみれば 般若心経とは 全体像は実に明瞭で その構成は見事に筋が通っていて しかも細部に亘って矛盾は無く 完璧に記述された思想大系であることが分かるのです。

そこには 初期仏教との継続性を保ちつつも 新しい概念を導入して壮大な世界観を説き そこに「宇宙の構造」と「人間と宇宙の関係」が徹底的に論理的に記述されていることが分かるのです。

しかしながら 般若心経がこれほどまでに難解で 意味不明となってしまったことには幾つかの理由があるのです。

その理由の一つ目は 空の三つの性質を示す「不生不滅 不垢不淨 不増不減」と記述された文章構造の解読が正しく為されず 虚無的に解釈してしまったことにあります。残念なことに この極めて重要な文章構造を深く掘り下げることなく ここには現代の数学的論理にも等しい 重要で緻密な内容が説かれているにも係わらず 重大誤訳を犯してしまったことにあります。

つまり 宗教から距離を置いた 学問としての仏教が この重要な文章構造を「空には実体が無いのだから 生じないし滅しない。けがれないし清くない。増えないし減らない」と安易に虚無的に解釈し 或いはこれと大同小異の上っ面だけの解釈で済ましてしまったことにあります。

これでは「空は初めからゼロなのだから ゼロに何をかけてもゼロ」と言っているに等しく 強引で幼稚なへ理屈であり 無謀なこじつけであるといえます。

これは 般若心経の最重要箇所に関する致命的なミスと言えます。

般若心経を解読するなら 先ず何よりも この文章構造を徹底的に解析しなければなりません。

何故にこの語句を選択し 何故に反対の意味の語句を対として 並べて表記したのか。何故に對に並べて さらにその意味のすべてを同時に否定しなければならないのか。その理由を明らかにしなければなりません。

そしてもし どうしても「実体が無い空」の立場に立つならば ここに提示した疑問に関して 合理的で矛盾のない説明をしなければなりません。

ところで「実体が無い」とは これはむしろ唯物論的世界観では常識であり 何も殊更取り上げるには値しない事柄なのです。今更そんな当たり前と思われている事柄をわざわざ説くような般若心経ならば これもまた 価値の無い教典となってしまうのです。

般若心経は 初期仏教で一部説かれていた虚無的な世界観を根底から覆す教典だからこそ 真に価値がある教典なのであり 科学的という名の唯物論が支配する現代人にとっても 実に衝撃的な 意味深い教典であると言えるのです。

誰であっても 般若心経を解説しようとするならば まず最初に この空に関する複雑な文章構造について 明確に説明し ここに提示した幾つかの疑問に答えなければならぬのです。これを避けては 般若心経の解説は有り得ないのです。

しかし 未だかつてこの文章構造を納得できる形で明らかにした文献は一切見たことはありません。

この点に関して 著者は本文中で 詳細に論理的に 全てに回答して示します。この語句の緻密な論理構造を解説するに当たり 著者が多少は得意とする現代の論理手法で注意深く解析することでこれを解説し 空の持つ本来の基本三特質を矛盾無く合理的に説明し 「実体の無い空」を完全否定しました。

これまでの解釈では 般若心経は只の唯物論的な虚無思想になってしまっていますが しかし この書が「実体の無い空」の虚無思想を完全否定したことで 同時に唯物論をも完全否定した事になっています。

このことから 般若心経は「唯物論を如何にして脱するか」との現代人にとっての重要課題をも 見事に解決してくれる貴重な教典であることになるのです。ですからこの般若心経は現代人にとっても特別の意義を持つ教典であると言うことが出来ます。

次に意味不明となった 理由の二つ目は『空に関連している複数の語句「色 受想行識 諸法」は新しい概念を表すために 初期仏教で遣われていた語句を再定義して用いた語句である』と 本經典中に これも論理式を用いてまで明記されているにも係わらず。そしてさらに 色と空との関係を 論理的に 厳密に記述しているにもかかわらず 誰もその事実に気づかなかったことにあります。

著者は 科学分野の論文記述の経験から これらの語句の構成の中に 再定義を含むいくつかの論理的記述を発見したのです。

一般には宗教と科学とは その文章表現の方法にかなりの差異があり 互いにかみ合わずに いつもすれ違いが発生してしまうものですが 事この般若心経に限っては 科学論文の記述手法がそのまま通用するという きわめて普遍的な記述になっていると言えそうです。

ここで明らかになった「空の三つの特質」と「再定義」から導かれる新しい概念に基づいて 般若心経における記述法を論理学に解釈すれば あれほど難解だった般若心経は 霧が晴れるように 見事にその全体像と緻密な部分像を現してきたのです。

般若心経の編纂者は 語句の曖昧さを徹底排除し きわめて論理的な空の記述に徹していることが明らかになりました。さらに 根幹となる語句の再定義の導入により 敢えてその真実を論理の中に示しつつ それを解く鍵をも呪文の中に隠し 二千年後に解読することで その目的を達成しようとしたことにあると想定されます。

般若心経の真実が緻密な論理性によって堅く護られたまま 現代に至り 今やっとその論理を読み解くことが出来て 真理は見事にここに開花したのです。

その時が来て 今その難解な論理は解読され ここに般若心経の全貌が明らかになったと私は考えています。

その解読結果は仏教の枠を越えた 人類共通の真理とすべき程のものと言わざるを得ません。般若心経の解読結果はすべての人類の思想史を総決算する程のものと言えるのです。

般若心経は二千年後の私達へのメッセージであり 現代の科学の発達を見越したような内容でさえあります。

つまり 般若心経の語る宇宙と 物理学が語る宇宙との接点がようやく見えてきた現代だからこそ 私達がこれを理解できる段階に到達したのだと言えます。

著者の見解は 以下にキッチリと論理的に議論を組み立てて 可能な限り曖昧さを排除して論じるつもりです。

特に 観自在菩薩が舍利子に直接語りかけるところ・・・この書では第三節・第四節・第五節に相当しますが。緻密な論理記述の連続となっていて ここはまさに圧巻なのですが・・・ここに「宇宙の構造」と「宇宙と人間の関係」が見事な論理展開で説かれていることを この書で示します。

## 【第一節】般若心経の編纂とその背景

### 仏説摩訶般若波羅蜜多心経

仏陀が説いた般若波羅蜜多の教え

#### 【般若波羅蜜多とは】

般若心経には 僅か 262 文字 + 16 文字の中に 6 文字の「般若波羅蜜多」という語句が 6 回も出現し 計 36 文字をも費やしています。よほど重要な語句であるらしいことはその出現回数からも明らかです。

そこで 般若波羅蜜多はそれほどの重要語句であるので ある程度の結論をここに示してから 先に進みたいと思います。

『宇宙は物質と精神の両面において 次元を越えて連続する相似性の多層構造によって出来ています。この物心両面の相似性の連続した多層構造を「宇宙のフラクタル構造」と現代用語の造語で呼称することにします。

さらに この宇宙のフラクタル構造に共鳴することを これも又造語でフラクタル共鳴と呼称します。

そこで 宇宙のフラクタル構造そのものを般若波羅蜜多と そしてしばしばフラクタル共鳴により 宇宙のフラクタル構造に積極的に係わることをも般若波羅蜜多と定義します。

人は般若波羅蜜多によって フラクタル構造の次元を越えて係わり合い 移動し 展開できる存在なのです』

般若心経はこの般若波羅蜜多の真実を現代に伝えるために 今ここに蘇ったのです。

ここに示した般若波羅蜜多の概略を知ってから 先に読み進めば 整理されて理解出来るように書き進めます。

#### 【般若心経の成り立ち】

仏教再生を目的として 般若心経の編纂者は深い悟りの体験から 世界観と それに基づく思想体系を構築しました。

しかしながら ここに明らかになった真実は 混乱の中に伝えられてきた初期仏教を一部否定し その後大乘仏教の一部分として位置づけ直すとする思想体系でありました。初期仏教を絶対として守ってきた人達にとっては それはあまりにも衝撃的な思想体系の出現であり 到底受け入れられない状況であったことは想像に難くありません。

その状況を鑑みれば この時代は 仏陀入滅後に歪んでしまった初期仏教の流れを汲む「実体が無い空」が全盛の時代であり「実在」や「超実体の空」を前面に出して説く 般若心経を公表することは危険な状況にありました。

編纂者はこの状況の下で この革命的な真理を受け入れる環境は未だ整っていないと判断し このまま真実を公表するのは時期尚早との結論に至りました。

そこで 思想体系における根幹となる複数の重要語句を 経典を構成する緻密な論理構造の中に その解法とともに埋め込んで呪文とし つまり暗号とし そのまま説明や解説を加えずに 世に出すことにしたのです。

そして 後の時代になって いずれかの日に いずれかの地域に 般若波羅密多の体験者が現れてくることを期待したのです。

そしてその整った環境で 般若波羅密多の体験者がこの経典を詳細に解析することで 壮大な宇宙観で構成した大乘仏教の神髄を この緻密な論理構造の中から正しく読み説いて 公表してくれることを想定したのです。

こうして 二千年後の未来において般若心経を蘇らせる計画を実行したのです。つまり この現代に 仏教再生を託したのです。

玄奘三蔵訳「小本・般若心経」を中心に 時々はサンスクリット語原典に戻りながら 「大本・般若心経」をも参考にして読み解いていくことにします。

以下は 著者による体験を重ね合わせて読み解き 現代用語で著したものです。

## 【第二節】趣旨説明

観自在菩薩  
行深般若波羅蜜多時 照見 五蘊皆空  
度一切苦厄

観音様は 般若波羅蜜多の瞑想に入られたときに 五蘊 即ち「人間が生きる世界」には 『現象』と『事象』が展開していることを確認していました。

観音様とは 観自在菩薩のことです。

さて ここでは『現象』と『事象』とをつかいています。つまり『事象』とは 空間と時間の中に物質とエネルギーが織りなす『現象』に 人間的意味を与えている『出来事』を意味しています。

言い換えれば 人間とは現象という物理的な意味を生きているのではなく 現象に人間が係わることでそこに新たな人間的意味が生まれ それを「事象」と呼称するのです。

そこで人間とは 「現象」そのものではなく この「事象」にこそ 重大な意味を置いて生きている存在である と言えるのです。

しかしながら 更に般若波羅蜜多の瞑想を深めていくと 『現象』と『事象』の範囲は確かに諸行無常であり 実体が無いのですが実はその背後には《宇宙の理念》が厳然として存在していると観えたのです。

しかも『現象』と『事象』には《宇宙の理念》が表現されていて 一切が必然で有り 一切が肯定されている と見定められたのです。

観音様は このように人間が生きる世界が《宇宙の理念》の下に秩序だっている状態を「皆空」と呼称しました。

そして観音様は この見定めに基づいて生み出した 衆生救済の方法を 以下のように示されたのです。

この節の末尾の「度一切苦厄」は玄奘三蔵によって付け加えられた語句です。このことで 観音様が人々を救ってくださると明記したことは 般若心経の価値を大いに高めたと著者は考えています。

般若心経の導入部がここに示されました。長文の「大本・般若心経」によれば 仏陀が主導する般若波羅蜜多の瞑想中に 観音様がシャーリプトラの質問に応えるという舞台設定で 説かれた

ものであることが分かります。

これは史実ではなく 架空の舞台設定ですが ここには混迷する仏教を何とか再生し 仏陀の真意を示そうとする編纂者の強い意志が読み取れます。

さてここに 皆空として最初に出てくる空の文字は サンスクリット語原典で確認すれば 形容詞で記述されていることからこの後に出てくる名詞の空のように 観音様が直接話法で語る空とは その用法を明確に区別していることが分かります。つまり「皆空」とは空を含めて 空の支配の下に有り 空が満ち満ちている状態 という意味になります。

先ず 般若波羅密多の真言を 解読された結果の形で以下に示します。

ここから始まる般若心経は論理性に満ちているので 慣れない人には難しく感じるどころがあるかも知れませんが 読者におかれては是非 厳密な論理的表現の背後に隠された 満ちあふれる情緒性を見失わないように 注意深く時間をかけて読まれることを 希望します。

ここからは観音様が語る 直接話法になります。

以下に始まる「舎利子」の語句は 観音様から舎利子への語りかけですが ここにも重要な意味があって その区切りによってそれぞれの節が対比している構成になっています。後に明らかになるように この対比は宇宙のフラクタル構造を意味しています。



### 【第三節】新しい生命観と再定義

舍利子

色不異空 空不異色

色即是空 空即是色

受想行識 亦復如是

【理解を容易にするために 結論を先に示しておく】

後に【第五節】で明らかになるように 色と受想行識をまだ知られていない 新たな人間の本質を示す語句として 緻密に計算し尽くされた論理性の中で「再定義」して示したのです。

何故 色と受想行識が再定義されていると言えるのか に関しては特に重要ですので 【付節一】で 著者が読み解いた論理式で証明することになります。

この節では 再定義された〔色と受想行識〕の語句が 従来の仏教で遣われてきた語句の〔色と受想行識〕から 大きく発展して しかも密接な関係を持って記述されています。

当初はそこに違和感をもたれる読者もいると思いますが 【第五節】にまで読み進むと大展開が待っていて 両者の意味が見事につながってきます。

そしてそこではじめて 般若心経が再定義という手法で著されたことの合理的理由が明らかになります。

再定義に関しては特に重要ですので【第五節】と【付節一】で詳しく示します。

文章の重要な区切りでは 観音様はシャーリプトラに名指しで語りかけています。

シャーリプトラよ！聴きなさい。

ここで観音様は色と空の関係 及び色と受想行識の関係を以下のように説いたのです。

ここでの注目点としては 次第に明らかになるように 【第三節】に表れる色 受想行識は【第五節】に表れる初期仏教の同じ語句（色・受想行識）とは区別されていて この両者が対比する形で色 受想行識が再定義され 議論されていくことです。

ここで示した再定義に従えば 玄奘三蔵訳の 色不異空 空不異色の部分は・・・

色は空に等しく  
空は色に等しい。

となります。

この節では 空の説明が無いまま 色は空に等しく 空は色に等しいと説かれます。

さて 空の説明の無いままでは色は空に等しいと説かれてもその意味がよく分かりません。そこで 予備知識としてこの【第三節】で説かれた空と【第四節】で説かれる空相との密接な関係についても 前もってその結論を先に示しておきます。

【空を知るには先ず空相を知れ】

【第四節】で詳しく述べることとなりますが 先ずここに結論だけを示しておきます。それは・・・

空を形式化したものが空相であり その〔基本三特質〕は永遠性 絶対性 及び普遍性です。

そして〔基本三特質〕は空相も 空も基本的に共通でありフラクタル共鳴の関係にあるという真実があります。

しかしながら 厳密な議論をすれば 空相の〔基本三特質〕を語句で表現したときには それがそのまま空の〔基本三特質〕と同じには成りません。

それは空は 既に決まった概念の語句では表現出来ない存在だからです。それだからこそ ここに空の直接的な語句による説明が無いのです。

そこで【第四節】においては 空を形式化した空相の〔基本三特質〕を語句で説明し その根元となる空を語句を遣わずに 空相との密な関連性でもって 間接的に説明しているのです。これが般若心経の絶妙な説き方なのです。つまり説明可能な空相の基本三特質を示し その根元が空であると説かれています。

この短い経典の中に どこまでも正確さを追究した実に丁寧な表現であると 感心せざるを得ません。

そこで この【第三節】では 空の〔基本三特質〕には直接触れずに 直接の説明を敢えて避けながら その存在を前提として 空と色と受想行識の関係を見事に説いています。

そこでこの書では 読者にとって分かりやすくするために

般若心経の編纂者が慎重に避けた [空の基本三特質] の語句による説明に関して ここでは敢えて空を空相の根元と位置づけて語句で示しました。

即ち [空の基本三特質] を それぞれ  
「永遠性の根元」  
「絶対性の根元」 及び  
「普遍性の根元」と表記して 解説を先に進めます。

さて ここまで結論を示したことで やっと準備は整いました。

ここで「空」の [基本三特質] で色と空の関係を論じれば以下のようになります。

先ず 玄奘三蔵版の色不異空 空不異色は 色と空の関係を  
入れ替えて 繰り返し表現をしています。それを訳せば・・・  
色と空は等しく 空と色は等しい。となります。

しかも 空は先に示した結論から 「永遠性の根元」「絶対性の根元」 及び「普遍性の根元」ですから 三つまとめてそれを「宇宙の本質」と言い換えれば・・・

色は「宇宙の本質」である空と等しく 空は「人間の本質」である色と等しい。  
となります。

そこで 色不異空空不異色は

「人間の本質」は「宇宙の本質」であり  
「宇宙の本質」は「人間の本質」である。

となります。

そして この色と空との関係は  
受想行識と空との関係においても同じである。

と言う意味に到達します。

これが般若心経の核となる最も重要な真理です。

それから 後に厳密な議論をしますが 色不異空 空不異色と 前後を取り替えての繰り返し表現は この関係が 論理的には「必要十分条件」という記述法であると 現代人であれば気づくことが出来ます。簡単に言えば 色と空は常に等しいと言う意味です。インドはアーユルヴェーダの国であり 数学の発祥の地ともいわれていることが思い出されます。

### 【サンスクリット語に戻って確認する】

次にサンスクリット語原典からこの部分を日本語訳で吟味してみましょ。【文献一】から引用してみます。

ここでシャーリプットラよ

色かたちはそのものずばり空なるものであり そのものずばり空なるものこそが色かたちなのであり

そのものずばり空なるものは色かたちと異なることなく 色かたちはそのものずばり空なるものと異なることなく

およそ色かたちなるものはそのものずばり空なるものであり およそそのものずばり空なるものは色かたちなるものであり . . .

. . .と続きます。ここで【文献一】の宮元啓一氏は空を実体が無いとする立場ですから その意味は無視して 日本語訳の色と空の関係のみを注目すれば 色と空の対は六個あり 対が三回繰り返していることが分かります。

玄奘三蔵版のように 色と空の関係は一回の繰り返しかけでも 十分に見えるのですが このようにサンスクリット語原典には

色不異空 空不異色  
空不異色 色不異空  
色不異空 空不異色

と 表記できるように 同じような繰り返しの文章が三対あります。(漢訳は著者)

そこでこの色と空の三対の意味を明確にしましょう。

ここで三対とした理由は 後に示すように 色と諸法との属性を対比的に示す必要性から 敢えて この部分を三対としているのです。

そこで この部分をより詳しく解釈することにします。

三対の内の一つ目の「永遠性の根元」に関して

色は空と同じであり  
空は色と同じなのです。

二つ目の「絶対性の根元」に関して

空は色と同じであり  
色は空と同じなのです。

三つ目の「普遍性の根元」に関して

色は空と同じであり  
空は色と同じなのです。

#### 【三対での表現の意味】

ここに示したようにサンスクリット語原典に遡って確認すれば、これ程の短い経典にも係わらず、わざわざ三対にまでして、何度も繰り返す表現となっているという事は、これが般若心経の中でも、特に重要な部分であることを意味していると判断できます。

以下、説明が多少複雑になりますが、編纂者の気持ちをより深く理解するために、複雑に絡み合った紐を、一つ一つ解きほぐしていきます。

即ち、空の「基本三特質」には三種類有って、色と空はそれぞれについて等しい、と言っていることになります。著者はそれを「永遠性の根元」「絶対性の根元」「普遍性の根元」と書いてしまいましたが、編纂者は空は直接接触してはいけないモノとして、敢えてそれを書いていません。

さらに、編纂者はその内容は後に出てくる空が自ら変質した空相が、それがさらに具現化した諸法の特質から類推して、理解しなさいと言っているのです。

人間にとって空は直接理解するのは困難ですが、諸法なら私達人間でも、多少は理解出来るかもしれないからなのです。

ところで、後に詳しく説明するように、諸法は空相の一部です。から、諸法の「基本三特質」は空相の「基本三特質」であり、「永遠性」「絶対性」「普遍性」であることを後に示します。

これだけの準備で先に読み進めば、編纂者の主旨がより深く理解出来てくると思います。

この文章の持つ複雑な構造について、さらに説明を続けます。ここで「空」の「基本三特質」の内の二つ「永遠性の根元」と「普遍性の根元」に関しては、空から多様性をもって分かれ

た色から見たときに初めて意味が有るものとして その表現は色の立場から繰り返しが始まっています。

一方 二回目の繰り返しは空から始まっていて 空不異色 色不異空となっているところが特徴的です。つまり「絶対性の根元」だけは分離の過程とその多様性に関係なく 空自身が本来的に持っている空側からの特質であるために 空の立場から繰り返しが始まっているといえるのです。

ですから この順番で表現することに十分な意味があり この複雑な文章表現に矛盾は無いことが分かります。

さらに 「空は実体が無い」とする定説では もう既に解釈は破綻していて 全く意味を成さないことは明らかです。

【再定義された色は人間の本質を示している】

後に明らかになるように

- ①・空は宇宙の根元です。そしてここまでの解釈から
- ②・色は空と等しい存在であることが明確になりました。それに加えて 【付節一】で明らかになる再定義の原理から
- ③・色には再定義以前の初期仏教の同じ語句（色）が対応していて 色はその同じ語句（色）の本質を表現していると言えます。そしてこの対応関係こそ般若波羅密多の関係であるということが出来ます。つまり フラクタル共鳴の関係であるということに成ります。

次に 受想行識もまったく同様に

- ④・受想行識は空と等しい存在であり
- ⑤・受想行識には般若波羅密多の関係として 再定義以前の初期仏教の同じ語句（受想行識）が対応していて
- ⑥・受想行識はその同じ語句（受想行識）の本質を表現していることが分かります。

これらの関係から 以下の真実が導かれます。

人間の本質は 再定義された色と受想行識との二つから成り立っています。

般若心経が編纂された時代の 初期仏教の中では 人間を語る時 色を肉体 受想行識をその精神作用とし この語句でもって人間を説明しました。

肉体とその精神作用は本来一体ですが 敢えて二つの部分として分けて呼称したのです。この分類の 合理性は次第に明らかになります。

そこで般若心経では この分類をそのまま人間の本質に対しても対応させるように 空から 個性と役割を持って分かれた

「生命体」としての**色**と その「生命体の精神作用」としての**受想行識**との 二つに分けて呼称しています。

このように本書ではイメージを掴みやすくするために 「生命体」の概念を持ち込み **色**と**受想行識**に対応させることを試みています。「生命体」の概念を持ち込まずに **色**と**受想行識**だけで直接イメージを掴めるのであれば それでも もちろん良いのです。

即ち ここでは**色**と**受想行識**を一体としてみても これを「生命体」と「生命体の精神作用」との 二つに対応させて 呼称することにします。

ここで**空**とは 全ての**色**と**受想行識**の母胎となる真の实在であり 存在の本質であり 究極の存在なのです。

人間とは **色**と**受想行識**の共同作業で **空**から地上に降りてきて **空**の中から《宇宙の理念》を展開している存在なのです。これが宇宙の生命活動なのです。

玄奘三蔵訳ではサンスクリット語原典の三回繰り返しを一回の**色不異空 空不異色**の繰り返しの纏めました。もちろんその事に論理的矛盾はありません。そしてさらに**色**即是**空空**即是**色**の部分を追加したことによって般若心経は補強されたと考えています。即ち・・・

**色**は しばしば**空**に帰還し そして再び**空**から**色**に戻ることができるのです。

### 【**空**への帰還と **色**・**受想行識**】

ここは**色**即是**空空**即是**色**の部分です。

玄奘三蔵訳に戻り 玄奘が意味を追加した部分と思われます。

つまり**色**は その役割を果たすために **空**から『現象の世界』にまで降りてきて 肉体と結合し 《宇宙の理念》の下に生命活動を営みます。

**受想行識**は「生命体の精神作用」を表現しています。

特に「肉体の精神作用」に結合して 「肉体」側により近い精神作用として 肉体側に寄り添います。

**受想行識**は **色**の主導の下に「肉体の精神作用」に結合し **空**につながる世界と現実の世界を結合して 現実世界でも活動することができる存在であり 現実世界で生命活動を展開する役割を持つ 人間のもう一方の本質なのです。

色は受想行識と一体化したまま しばしば そして一時的に空に帰還し 空から『事象の世界』に戻って活動することが出来るのです。

一方後述するように 人間は生涯を肉の身を持ったまま空に帰還しつつ 空の立場から現実の世界に働きかけることを示しているのです。

色と受想行識は本来空なのですから 色と受想行識が空に帰還できるのは当然と言えば当然なのです。その当然のことは人間が生きていく上で重要な意味を持ちます。

受想行識は色とまったく同様に 空の〔基本三特質〕に関して 空そのものです。

ですから 受想行識は色と一体化して 空に帰還できます。

色と受想行識は生命体とその精神作用であり 常に一体ですから どちらも空と同じとして扱うことが出来る事になります。

【再定義にそって解釈してこそ 初めて意味が明確になる】

このように [空]と[色・受想行識]及び 次節に出てくる[諸法]を 新しい宇宙観を示す新しい概念を持つ語句として 般若波羅密多の原理に従い 再定義したのです。

さて[色・受想行識・諸法]が再定義されているという事実は【第五節】の語句の配列の論理性の中に隠されていたことが発見できたのです。そしてこの論理性こそが 時代を越えても言語が変わっても 決して変わる事のない 再定義の決定的な証拠を今に残しているのです。

(※再定義の証拠は重要ですので その詳細を【付節一】として示しました)

【空は定義しがたい存在】

ここで [空]とは大乘仏教の根幹ですが これは定義し難い究極の存在です。[空]を定義できない理由とは それは明らかなことなのです。

ここでしばし 私達の住む世界を俯瞰した視点で捉えて そこでよく考えてみましょう。私達の言葉は 常に私達の世界の中で生活した経験を基にして生まれた言葉から成り立っており それ以外の世界を前提とはしていません。ですから [空]という私達の世界以外の世界を私達の世界の言葉で表現することはほぼ不可能に近いこ



となのです。私達の言葉では〔空〕の世界を表現するための語彙が決定的に不足しているのです。

私達の言葉で言えることは〔空〕とは宇宙の根元であり《宇宙の理念》であり 完全な存在であり 超実体であるということまでです。しかし 般若心経では言葉と論理を駆使して その詳細にまで踏み込んでいます。それは【第四節】【第五節】で示されることとなります。

そして【空】とは説明も出来ず 名を付けようのない究極の存在ですから 直接的に名付けることを避け 修行によって「心を空しくした時」にのみ それを体験できることから「そこに至る手段」と「その時の心の状態」をもって呼称することとし それを〔空〕と名付けたのです。

このように 人間は常に空の〔基本三特質〕としての「永遠性の根元」と「絶対性の根元」と「普遍性の根元」を 同時に 矛盾無く 合わせ持ちながら 生命活動を展開することが出来るという真実がここに示されたのです。

これは価値の混乱する現代においてこそ 特に重要な意味を持つてくることになるのです。

## 【第四節】 「生命活動の場の根元」と再定義及び「基本三特質」

舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不增不減

続いて 諸法と空相の関係について やはり論理の中に隠して 「再定義」して示すのです。観音様は諸法を人間の生きる「生命活動の場の根元」として以下のように説くのです。

シャーリプトラよ！よく聴きなさい。

ここで 諸法とは空相に所属している存在です。

そして空相とは空が自らを変質させ形式化することで法則的に表現し 空の特質を受け継いでいます。

つまり 諸法とは 空相に所属し 「生命活動の場の根元」となる複数の法の集合なのです。

ここで 諸法とは法の複数形ですから 「生命活動の場の根元」の「法」の 集合を意味しています。

ここで 諸法を色と受想行識との関連性で見てください。

⑦・空相は空を具現化し 形式化した存在でした。そして空は宇宙の根元でした。そしてここまでの解釈から

⑧・諸法は空相に含まれる存在であることが明確になりました。それに加えて 【付節一】で明らかになる再定義の原理から

⑨・諸法には再定義以前の初期仏教の語句が対応していて 諸法はその同じ語句（法）の本質を表現していると言えます。

そしてこの再定義した語句と再定義以前の語句との対応関係こそ般若波羅密多の関係であり それは色・受想行識・諸法が初期仏教の同じ語句（色・受想行識・法）のそれぞれに対応している関係であるということが出来ます。

### 【諸法は物質宇宙と精神宇宙の根元】

空相に所属する諸法の さらにその中の一つの法は当然「基本三特質」を持ちます。そしてその法は法の外側に 人間が生きる環境として つまり五蘊の一部として 諸行無常の「世界」を創り出しています。

この事は次節で説かれますが 諸法の外側には 一つ一つの法が自ら生み出した「世界」 即ち「法」があって それぞれの法はこの「法」という「生命活動の場」の中で展開する『事象』と『現

象』を制御し管理していることを意味しています。

### 【現代宇宙論との対応】

現代宇宙論との対応を見れば 諸法とは人間が考え得る最大限の物質宇宙に対する「全宇宙の根元」を示しています。

そして 諸法の中の一つの法は一つのビッグバン宇宙の背後にあって その法に特有の『事象』と『現象』を制御し管理しているものと定義しましょう。

その時 一つ一つの法が管理する世界の中には 独自の世界があって 独自の生命活動が展開していることとなります。

一回のビッグバンで生まれた宇宙はこの一つの法の中で発生したと考えられます。さらに 諸法とは法の複数形であることから 空相の中には複数のビッグバン宇宙が生まれていることとなります。

「世界」はこの 諸法の中の一つの法による一つのビッグバン宇宙に所属し 人間は物心両面において この環境に一切を支えられ 守られて生きているのです。

私達の所属する法は 諸法の一つであり 諸法は空相に所属し 空相は空を形式化したものですから 法は空の性質をそのまま受け継いでいます。

諸法はここに 様々な「生命活動の場の根元」全体として再定義されたことになるのです。

既に述べたように ここで 空は究極の存在であり 直接説明することはきわめて困難です。

そこで空を形式化した空相を通して さらに空相に所属する 諸法の持つ特性を「基本三特質」として 結果的に空を間接的に説明することにします。

ここで 直接的にではなく 何故間接的に説明することに合理性があるのか と言えば それは 諸法と空相と空は 般若波羅密多の関係に有るから それが可能なのです。

現代用語で言い換えれば 諸法と空相と空は フラクタル構造を成していて フラクタル共鳴の状態にあるから それが可能なのです。

般若波羅密多の意味がかなり明確になってきたと思います。

さて次に 既に結論は示してきましたが いよいよ「基本三特質」について詳しく説明します。

その〔基本三特質〕の一つ目は「不生不滅」であり 永遠性を表しています。

つまり 生と滅を超越し 完全なる存在の表現として 時間を超越して存在し続けていることを意味します。

従来は「空は実体が無いから 生まれることもないし 滅することもない」とする解釈が主流でしたが 本書では「空は永遠の存在で 超実体として存在し続けているのだからこそ 今更生まれることも滅することも ないのだ」と解釈します。

ここでは 生と滅という意味の対立する語句のそれぞれを同時に否定することで 今居る時間に縛られた世界を排除し それらの対立する概念を超越した 時間の外側のところに永遠性という新たな概念を創り出しています。

ただし 「永遠性」という語句そのものが 現象の世界の中の ある特殊な状態を表現する語句であるため 「永遠性」を空の特質を表す語句とするには 多少無理があるといえます。ここで「永遠性」とは 時間軸の上での永遠を言っているのではなく 時間を超越した存在を言っているのです。そこには時間が無いのではなく 時間の根元となる より本質的な特質が厳然として存在するということなのです。

そこで般若心経では「不生不滅」として 今自分の居る「現象の世界」の時間軸の両端の 互いに相反する状態を同時に否定することで 自分の居る現象の世界を除外視し その外側に出ようとしているのです。

この部分を 現代物理学的に補足すれば 時間・空間・エネルギーという 基本要素から成る「現象の世界」の その外側の世界を示していると言えます。

つまり この手法によって自分の居る「現象の世界」の外側の空の世界を表現しようとしているのです。

この表現法をここでは「自己排除的二元超越法」と呼称します。これは現代でもこのまま通用する 見事なまでの数学的論理であると言えます。

ただし この書では 一つの語句で適切に表す語句は存在しないので 今後もやむを得ず「永遠性」という語句を遣い続けることにします。

次に〔基本三特質〕の二つ目は「不垢不淨」であり 絶対性を表現しています。

つまり「垢」と「浄」との対立を否定することで 善と悪の対立から成る二元論を超越し、そして相対価値を超越した絶対価値を表現していて一元論的に 人間による生命活動の精神性の中心的支柱となっているのです。

従来は「空は実体が無いから 垢も浄も無い」とする解釈が主流でしたが 本書では 「空は完全な存在で 超実体だからこそ今自分の居る 二元論的な垢と浄の対立と つまり二元論としての善と悪の対立する世界ではなく 善悪の対立を超越した絶対の世界」つまり空の世界が存在すると解釈するのです。

ここでは 垢と浄が無いと説いているのではなく 垢と浄を超越した 絶対価値が存在していると説いているのです。

先の 不生不滅が「現象の世界」を越える表現であったのに対して この不垢不浄は「事象の世界」を越える表現であると言えます。

これも自己排他的二元超越法であることに注目して下さい。

さて 次は〔基本三特質〕の三つ目ですが。

玄奘三蔵版では「不増不減」と訳されています。

従来は「空は実体が無いから 増えることもなく 減ることもない」とする解釈が主流ですが 玄奘三蔵は「空は超実体であり 同様に諸法は 増減のある『現象』と『事象』の展開する「世界」ではないから つまり「変化変容する諸行無常の世界ではないから 不増不減である」と翻訳したのです。

それは即ち 今自分の居る変化変容する諸行無常の世界を「不増不減」と否定することによって 空相の基本三特質を表現しています。

言い換えれば 不生不滅の「現象の世界」と不垢不浄の「事象の世界」との両方を 増と減を繰り返す諸行無常の世界と見定めて それらを共に 同時に排除し その外側に 増と減の無い 不変にして普遍である諸法の世界を 定義しています。

そして その世界を般若波羅密多の関係にある空相の世界として、そしてさらに般若波羅密多の関係にある空の世界として〔基本三特質〕を見事に位置づけています。

ここに記述してある真実は 「この私達が住んでいる諸行無常の世界の外側に 色 受想行識 諸法という 空の世界が存在する」と記述しているのです。この真実こそ 般若心経の中心思想なのです。この書の読者には この真実をジックリと味わって頂きたいところです。

この玄奘三蔵の解釈は サンスクリット語の表記を更に進化(深化)させていて 実に理にかなった表現をしているといえ

ます。

玄奘三蔵は空の本質を正しく理解した上で 玄奘による自己排他的二元超越法として とても分かりやすく解釈した 実に高度な表現をしていると言えます。

この玄奘の解釈は本書の解釈と基本的に同じ立場にあることが確認される重要な証拠であると言えます。

#### 【サンスクリット語原典に戻って確認する】

ところで「不増不減」の部分を 本書では敢えてサンスクリット語原典に戻って解釈し 元々の意味を確認します。

サンスクリット語の原典に遡れば 諸法の持つ基本三特質の三つ目の特質は 決して無視はできない内容となっています。そこには 新たな重要な発見があるのです。

この部分の サンスクリット語の原典の日本語直訳を見れば 「欠損があるのでもなく 完全に満ちているのでもない。(文献一)」と記述されています。これを仮に「不欠不満」と表記しておきます。これも自己排他的二元超越法と言えます。

空は空相として 多様的に表現され そこに欠損はなく しかも空相が完全に諸法で満たされることはないのです。

この意味を 例え話で分かりやすく説明してみましょう。

ここに「美しさ」の表現された花という対象と その花の持つ「美しさ」という高度な概念を考えると 世界には沢山の種類の花があって そこには花の多様性があり どれも「美しさ」を持っていますが それで「美しさ」の全てを表現したことには成りません。今ある沢山の花は これで全てではなく さらに種類を増やし 数を増やす余裕があります。

つまり 今のままで「美しさ」の概念に欠損があるわけではなく そして同時に「美しさ」の概念が全て満たされているわけではない という意味になります。

読者におかれては この部分を何度も読んで「不欠不満」の意味を 諸法と空相との関係に置き換えて 理解を深めてください。

この真実を正しく知ることが独善の無い 普遍的な愛を知り世界の恒久平和の姿を理解することに繋がります。

私たちの住む世界は有限であり きわめて限定された世界ですから そこにすべての概念を表現することは不可能ですが それでも出来るだけ多様性を尊重し そこに普遍性を確保しようとするのが 宇宙の生命活動なのです。

もし一つの宗教で世界を統一するなど考える人達が居ればそれはまさに人類の可能性を頭から否定することになり 普遍性に最も反することになるのです。現代から未来にかけて そのような傾向を持つ宗教の存在価値は既に無くなっていると言えます。

#### 【色と諸法との位置づけの違い】

さて話を戻しますが ここで諸法空相を現代的に論理表現すれば 「諸法は空相である」となり 「諸法であるためには 空相であることが [必要条件] である」ということになります。

多少面倒な表現になりますが 敢えてこの意味を補足すれば 【第三節】における色と空の関係は[色→空] [空→色]との表現であることから [必要十分条件] でしたが 【第四節】の諸法と空相の関係は[諸法→空相]のみであり [空相→諸法]の表現はないことから [必要条件] であると主張しているのです。

まあ この関係を日常の言葉で平たく言えば 色と空は全く等しいが 空相と諸法は対等ではなく 諸法は空相の一部であると言っていることになります。

これはとても緻密で厳密な論理です。次第に明らかになります が この表現にはとても深い意味があります。

#### 【諸法が複数形で書かれていることの意味】

ここで 諸法とは複数形の法であることから 空の表現としての空相は多様性をもって表現されることを示しています。このことは普遍性に直結する表現なのです。

ちなみに 現代宇宙論的に言えば 時間・空間・エネルギーとは諸法の中の 私達の住む一つの法に所属する「ビッグバン宇宙」の基本構成要素であり 一つの法に固有の存在であります。私達の知っている物理法則はこの一つの法の中でのみ有効であり 他の法では別の物理法則が成立すると考えられます。

つまり 私達が直接触れているのは私達が所属する一つの法の中の ほんの一角なのです。

一方 色と諸法は 対比的に表現されていて そこに重要な意味が隠されています。

そこで . . .

#### 【色は空中に充ち満ちている存在である】

この節で 法に関しては諸法と複数形で表記されていました。一方 前節では 色に関しては諸色と複数形では表記されていなかったことは 特に注意を要するところです。

それが意味するところは 厳密には色とは一つ二つと数えら

れるような 完全に分離された存在ではなく 色は空の全要素を持ったまま 空の各要素の密度を様々に変えて 空中に満ち満ちている存在であり 全空中に分布している存在であると言えます。

そして受想行識も色に準じます。

つまり各要素の密度分布の違いは個性とその働きの違いなのです。つまり 人類の一人一人は決して孤立した存在ではなく 実は空という本質の世界を共有し その働きの適した濃度に分布をしている存在なのです。

・・・話を戻します。

諸法とは空自身を多層的に 多面的に 多層的に表現した空相であり 複数の法から成っています。

さらに諸法とは 空自身の性質の投影として 空相の中に多様性をもって表現されています。

空相の中に複数の法 即ち諸法が多様性をもって表現されていて それでいて 空相の性質の投影として 決してそこに欠損があるわけではないが それでいて空相の中に諸法が完全に満たされることはない という意味なのです。

これは現代の表現では「多様性の中に普遍性が保たれること」を意味していることとなります。

これは人間による生命活動の精神性の基盤となっていて 愛や赦しや 進歩と調和の概念を生み出しているのです。さらにこの事は 人類の恒久平和の実現にとって 最も重要な原理となります。

従って「基本三特質」の三つ目は「不欠不満」であり 普遍性を表現していることとなります。

#### 【多様性の中に普遍性が表現される】

諸法は法の複数形であることから その帰結として 《宇宙の理念》は多様性を持って しかも普遍的に表現されることを示していることは既に明らかにしました。

ところで一方 色・受想行識の方は固有名詞として表記されていることから 複数形の表現の諸法とは対比的な表現となっていることが読み取れます。その対比とは 空の世界と空相の世界の対比を意味します。

その対比の意味を重要視すれば 色の個性には多様性があるが その中に普遍性が表現されますが 色は複数には成らずに あくまで種類としては一種類であることを意味していることとなります。一方 諸法は多様性があるが 形として別れた複数形として表現されることを意味しています。

多様性があるが単数形とは不可思議ですが これを分かりや



すく言えば 宇宙のどこに行ったとしても 宇宙人といえど 人間と別ものではなく その本質は 色・受想行識であるということです。

ここまで空・色・受想行識・空相・諸法について詳しく述べてきましたが 未だ触れていないこととして 「諸行無常の世界」があります。我々が生きる この「諸行無常の世界」と「空の世界」との関係を説明したいのですが まだまだ説明のための語句が不足しているので 詳細は次の【第五節】で述べます。私達が如何に生きるべきかを考えるにはこの【第五節】を知って初めて可能となります。

## 【第五節】空中に 初期仏教の世界は無い

是故空中 無色無受想行識 無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法 無眼界 乃至無意識界

これ故に 空中には 「初期仏教が説くような 人間と世界」は存在しません。

この節の文頭には「是故空中」とあります。是故とはその前の【第三節】と【第四節】で既に説かれている 空 空相 諸法 色 受想行識 のことを受けています。そして この章の「無」を伴って出てくる色 受想行識 から始まる一連の語句は これは再定義の基となった初期仏教の語句であるということに注目してください。

それは即ち [基本三特質] を示す 空 空相 諸法 及び空に等しい色・受想行識 は空中の存在であるとの記述を受けて その空中には「無」以下の色・受想行識・等の 初期仏教の語句で表されるものは存在しない と記述されているのです。

ここで 再定義される前の初期仏教では 元々色は肉体 受想行識 は肉体に付随する精神作用という意味を持っています。

つまり この記述が「再定義」が明確に示されているところなのですが これは特に重要なので 【付節一】に論理的に詳しく示しておきました。

そこで・・・以下のようになります。

空 空相 諸法 色 受想行識 から成る空中には 初期仏教が説く旧語句 即ち[色・受想行識・眼耳鼻舌身意・色声香味触法・眼界から意識界まで]無いのです。

重要な部分なのでさらに詳しく見てみましょう。

ここで 無 眼耳鼻舌身意 無 色声香味触法 というように 「無 以下」と次の「無 以下」と 対として記述されていることに着目してみます。ここではどちらも「無 以下」を否定しているのですが 初期仏教の語句と 再定義された空中に分類される語句との関連性を知るためにも この部分の解読は必要です。

ここで 再定義前の初期仏教の語句に関して 前半の「無 以下」は 肉の身の人間の内側の色・受想行識 の持つ 感覚知覚 及びその総合評価の結果であり そして後半の「無 以

下」は それに関連している 人間の外側の対象であって 全て一対一に対応して記述されています。

そして 色・受想行識のそれぞれを さらに詳細に分解して記述しています。

即ち 眼は色に 耳は声に 鼻は香に 舌は味に 身は触に 意は法に という具合に対応して記述されています。

そして特に 現代のいうところの五感と それプラスもう一つの感覚である「意」が「法」に対応しているところが 後に重要な意味を持ってきます。

現代人は五感で全てとっていますが この時代の人達は 「意」が「法」という環境を直接受け取っているとの認識でいたことが分かります。そしてそれは真実であり 正しいのです。しかしながら 結局はそれらも全て 非実在であるとして「無」で否定され 空中の存在ではないと決めつけられることも重要です。

そしてここから 法の意味は 「生命活動の場」ということになります。

つまり 人間の内側の「意」と 人間の外側の環境としての「法」は互いに強い関連性を持って存在しているのです。

人間の内側の「意」に対して 「法」は人間の外側の環境ですから それは現象と事象の世界を含むことになります。現象と事象が揃って 生命活動の場という意味を持ちます。

そして当然 それらを支配する法則も法であり さらに空由来の諸法は確かに精神性を持ち その諸法ら付与された法の持つ精神性もまた法なのです。諸法の持つ精神性と法の持つ精神性も これもまたフラクタル共鳴の関係にあります。

即ち 般若心経では「法」は生命活動の場であり さらにその「生命活動の場の根元」が諸法である と再定義されているのです。

それから 無眼界・・・無意識界 と続きますが 無として非実在とされているのは これは現代で言えば 五感による知覚から始まり 認識に至り その総合判断機能までの 様々な意識階層を記述しています。

そして 最終的には現象と事象はどちらも 実在ではないとして否定されます。

そして 多層構造の意識の最深部では色は色に直接接していて 同様に受想行識は受想行識に直接関わっていて フラクタル構造を構成しているのです。

そこで 纏めです。

初期仏教が説く色と受想行識 即ち人間の肉体と 肉体に付随する精神作用は空中には存在しません。

さらに初期仏教が説く受想行識が作る世界 即ち人間の五感の知覚・認識 及び五感による認識の その対象となる人間の外側の世界は諸行無常でありそれは空中という真実の世界の中には存在していません。

ここに 初期仏教で云う「法」は「無」 であると説かれます。それは即ち 私達が五感を通して認識する対象の世界は真実のものではなく 諸行無常であり 実体が無く これは錯覚なのです。つまり現象も事象もそれだけでは実態ではなく 錯覚なのです。

そして これらの錯覚が生み出す「法」の世界も その基となる肉体の生み出す「意」の世界も実体は無く これ単独では錯覚に過ぎないのです。さらに 意識は多層構造と成っていて 最深部では色・受想行識と 空中の世界の色・受想行識とが フラクタル共鳴状態で結合し 共鳴している状態が本来の人間の姿です。

そこでは 色には空が満ち満ちていて 受想行識にも 空が満ち満ちている 状態なのです。つまり観音様からは五蘊皆空と見えているということです。

このように フラクタル共鳴状態で結合している状態を 以後「フラクタル結合」と呼称し その状態を創り出すことを「フラクタル結合する」と呼称します。

ここに 実在と非実在との境界があります。

このように初期仏教は これだけでは錯覚の世界 実体の無い世界「無」の世界に留まっていることとなります。

しかしながら ここで驚嘆すべきは 【第三節】と【第四節】で示したように 空中には〔基本三特質〕を満たす実在の世界が存在するという真実です。

そして すべての根元の空と人間の本質である色・受想行識と 環境の根元としての空相 及び生命活動の場の根元としての諸法はこの空中の存在なのです。

言い換えれば 空中には 空そのものと 「生命体」としての色とその精神作用としての受想行識と 空を形式化した空相 及びそれに所属する諸法が実在しています。これが【第三節】と【第四節】の結論でした。

【語句が揃ったところで 五蘊皆空を吟味する】

ここで 説明のために「無以下で表現された空中の外側の世界」を定義します。これをここでは「空外」と省略して呼称すれば つま

り「空外」は 諸行無常の世界であり それだけを観察すれば それは前述の通り 錯覚の世界に過ぎません。

観音様から見れば この錯覚の世界では 肉体としての色と その精神作用としての受想行識と 総合認識の「意」の対象としての「法」が 空中から孤立していて 実に不安定な存在として 見えています。

このことは一人一人の人間の主観が 各自の事象を生み出し それぞれ各自の世界を作っていて それが錯覚の世界を作っていることを意味しています。

ここで 観自在菩薩が般若波羅密多の深い瞑想により 錯覚の世界を通り抜けて 真実の世界に到達して見れば 五蘊とは「空中」と「空外」の両方を含んでいて フラクタル共鳴の関係にあると見えてくるのです。

そこで五蘊皆空とは 空中と空外が般若波羅密多の関係 即ち宇宙のフラクタル構造全体が フラクタル共鳴状態にあることが理解出来てくるのでした。そしてこの状態を観音様は皆空と呼んだのです。これまで初期仏教で語られてきた諸行無常の世界としての 空外だけを切り離して 空外を幾ら詳細に観察しても それは皆空ではありません。ましてや空ではありません。

【「生命活動の場」として法を位置づけ その根元として諸法を位置づける】

ここで諸法は「生命活動の場の根元」と再定義しましたから 一方の「法」は「生命活動の場」そのものとなります。

つまり諸法は初期仏教の語句の法との関係で再定義されていることとなります。

つまり この法の本質として 法の背後にあって 法を管理するのが再定義された法ということになります。

【整理してみよう】

整理すれば 色と色が 受想行識と受想行識が そして諸法と多くの法が対応していて それらは全てフラクタル結合されています。

そしてさらに「空」と「色・受想行識」と「色・受想行識」が さらに「空」と「空相」と「諸法」と「多くの法」も フラクタル結合されています。ですから 般若波羅密多の「瞑想」と「行」によって 深いフラクタル共鳴の状態に至ることができるのです。

このように次元を越えて連続する相似性の関係が「宇宙のフラクタル構造」なのです。そして 「宇宙のフラクタル構造」は「基本三特質」の三つの軸として フラクタル共鳴を発生させているのです。

正にこれこそが大乗仏教の神髄であり 般若心経の説く宇宙観なのです。

このように人間は空の外側に肉の身を置きながら 空中の世界に達することが出来る存在なのです。何故なら「人間は本来 空の住人だから」なのです。

ここに 般若心経においてはじめて 大乗仏教の神髄として 色・受想行識・諸法が空中の存在として示され 一方 空中の外側には初期仏教の色・受想行識・法を「宇宙のフラクタル構造」として位置づけたこととなります。

ここまでで 宇宙のフラクタル構造を理解することで 般若波羅密多の意味はより明確になったと思います。

#### 【諸法と法の境界】

色・受想行識と色・受想行識との対応は既に述べましたが ここで諸法と法との対応について さらに追加しておきましょう。

以下は一つの解釈なのですが 時間の根元と空間の根元とエネルギーの根元は空中の諸法に所属し その中から生まれた 時間軸と空間と エネルギーと エネルギーから変質して生まれた物質は空外の「法」に所属することになります。

「法」の世界では ビッグバンによって エネルギーの一部は物質となり 限られた空間と 時間軸上で様々な核反応や化学反応によって性質を変え その密度や分布によって多様な現象を作ります。そして物質の一部は単細胞の発生に至り やがてバクテリアや植物や動物にまで進化していきます。従って 生物は諸法の直轄下にあると同時に 法の産物であることとなります。

ところで 核反応や化学反応は単に物質の作用として説明できませんが その中から植物や動物に進化するというのは なかなか説明が付きません。実は それこそがフラクタル共鳴の作用なのです。そしてさらに ビッグバンの前後を含め その後の展開の全てがフラクタル共鳴の作用であるというのが正しいのです。

このように時間と空間とエネルギーは 諸法と法の係わりの中に有り さらに諸法と法の境界から法の側に存在していると解釈出来ます。

この境界部分が唯一私達現代人が知ることが出来る 諸法の一端であると言えます。そして 現代物理学も まさにこの境界の部分の研究にまで到達していると言うことが出来るのです。

さてここで 見逃していけないことは 私達は法に生きているのですが 物理現象をそのまま生きているではありません。物理現象に元を置く「出来事」に意味を見だし そこに精神性を見いだして居るのです。そしてそれも法の範疇です。つまり 最初に話したように 私たちは『現象』の中に住んでいても 実は『事象』

を生きているのです。

#### 【二つの問題提起】

ここで 諸法と法の境界と その内容の分類に関して 二つの問題提起をしておきます。

この書では 物質が生まれるビッグバンの時点からその直後をその境界としました。現代物理学でいうビッグバンは般若心経の「諸法」による「法」の発生と対応していて ここが現代物理学と般若心経との接点となっているのです。

しかも 現代物理学においては 時間・空間による「現象の発生」について 未だ明確には成っていません。ましてや 「事象の発生」については手つかずのままです。

ですから 諸法と法の境界については今後議論が出てくるところでしょう。

二つ目として 実は 諸法も法も精神作用を含んでいることは明らかですから 現代人が知っているのは物質面からみた諸法の一部と 法の一部ということになります。

現代科学では精神作用をもつ何らかの対象に関しては一切不明なのです。例えば 法に所属していて物質に作用する「精神の作用子」という概念は未だ現代科学には存在しません。

ましてやその「精神の作用子」に対応していて その根元において制御し 管理しているであろう 諸法に所属する「精神の制御系」というものは 現代科学においてはまだまだ未知の分野です。

つまり現段階では 現象と事象の関連性については一切不明なのです。そこには強い関連性があるにも関わらず なのなのです。

#### 【フラクタル構造のまとめ】

空中の存在 即ち空と空相 色・受想行識・諸法は 初期仏教で説かれた世界の中には存在せず 初期仏教では説かれていない 全く新しい概念なのです。

ここまでの表現から既に明らかですが 色・受想行識・諸法は 初期仏教の旧語句 色・受想行識・法とフラクタル結合しているという重要な真実が見えてきます。

そして既に明らかですが ここに「敢えて同じ語句を遣って再定義した」ことの意味も必然であったと言えるのです。実に見事な論理の構成が成されていると分かります。

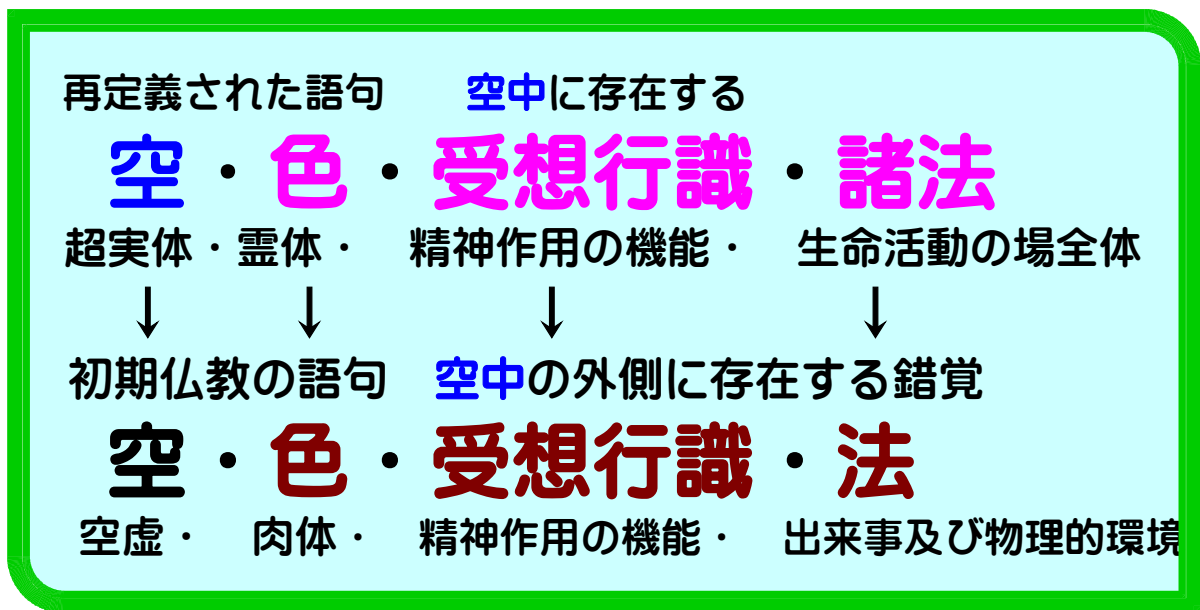
つまり 再定義された語句とそれに対応する旧語句とは 同時に議論される限り フラクタル共鳴の状態にあることを示しています。

そして旧語句が単独で議論される限り それは「空中」から孤

立した語句であり 否定されることになります。

さて 色・受想行識・諸法と色・受想行識・法が対応して フラクタル結合していることから 現実の世界は宇宙の投影であると言えるのです。

つまり投影された現実の世界が宇宙のフラクタル構造を投影していると自覚することで 深いフラクタル共鳴の状態に至るのは これは必然なのです。



に般若波羅密多の意味がより明確になってきたといえます。

このように ここまでで 大乘仏教が語る実在としての「**空中**の存在」と 初期仏教が語る世界 即ち「無」とすべき非実在としての「**空外**の存在」と 二つの領域にきれいに整理されたこととなります。

さらに この「**空中**の存在」と「**空外**の存在」がフラクタル結合していて 般若波羅密多の「瞑想」と「行」により 深いフラクタル共鳴を求めて生きることが人間の生命活動であるのです。

もちろん 宇宙は全てが常にフラクタル共鳴の中にあり フラクタル共鳴が無いと見えるのは それは錯覚なのです。しかし 錯覚といえど 錯覚している人にとっては それが世界の全てなのです。

フラクタル共鳴には ほぼ孤立しているように見える浅い共鳴状態から 完全な深い共鳴状態まで 様々な段階が無数にあり それが同居して影響を与え合っているのです。

そして現代の人類は フラクタル共鳴の無いとみえる段階から 深いフラクタル共鳴の段階へ向かって 移行しつつあります。



つまり ここではフラクタル共鳴という 真実がどうあれ 一人一人の人間がそれをどのように捉え 理解するか という事象こそが その一人一人の運命に決定的な意味を持つのです。

ここまでにフラクタル構造 フラクタル結合 及びフラクタル共鳴として整理された真実は 宇宙を理解するうえで きわめて重要です。

【観音様が 暗に示しているシャーリプトラのフラクタル構造】

著者は般若心経の解釈において 【第三節】【第四節】【第五節】と 重要な三つの節として 区切りを入れました。著者のこの分類の主旨は空の世界と 空相の世界と 空外の初期仏教の世界とで 三つの世界に分類するためです。

ところが サンスクリット語に遡って調査してみると 観音様はこの著者の区切りと同じ場所で シャーリプトラに三回語りかけをして 三つの世界に分類しています。それだけなら特に驚くことではありませんが 特記すべきは 観音様が語りかけるシャーリプトラのスペルがそれぞれ異なっていることです。

著者が解読した 般若心経を理解した人であれば その事実が何を意味しているかは 明らかです。それが意味することは 空の世界のシャーリプトラ 空相の世界のシャーリプトラ そして空外の世界のシャーリプトラが居て それらが般若波羅密多の関係 つまりフラクタル共鳴の関係にあることを示しているという 隠された真実がそこから読み取れます。

般若心経は正に般若波羅密多を説く教典であることが このことから理解出来ます。

## 【第六節】初期仏教の否定と その後の肯定

無無明 亦無無明尽 乃至無老死 亦無老死尽 無苦集滅道  
無智亦無得

般若心経は般若波羅密多による新しい宇宙観を説くからこそ 空中の外側を説いた初期仏教の十二縁起 四諦の旧経典を完全否定しています。

即ち 初期仏教の代表的な経典である十二縁起の文頭と末尾を「無」で否定することでさらには四諦の要素である「苦 集 滅 道」を「無」で否定することで これらの経典全体を否定しています。そして これらの経典には智もなく得も無いと断言しています。

ここは般若心経の特筆すべき箇所です 仏教再生には欠かせない所です。

即ち 「出来事を因縁因果によって解釈し そこに人生の苦の原因を求め 苦の分析に陥ることは人生の本質ではなく 間違いである」と明確に説いていることに成ります。初期仏教の世界だけでは 何をどのように分析解析しても 苦は解決しないという意味です。

仏陀入滅後の 混乱する時代に扱われていたこれらの初期仏教の経典は これまでのように空中の存在を無視しているために 般若波羅密多から切り離れ 孤立した錯覚の世界を作っていることになるのです。つまり 初期仏教の作る全ての事象はフラクタル共鳴にはないのです。

従って それらは「無」とすべき「非存在」の存在であり 錯覚ですから その錯覚の作る事象は全て否定されるべきものです。

従って そこには智慧も無く 得るものも無く これらは悟りには全く関係がないと断言しています。

前節【第五節】と この【第六節】で 空の立場から「無」として否定したのはすべて孤立した「初期仏教の世界」の内容です。

しかし これらを一旦「無」として否定することで 孤立していた「初期仏教の世界」を 宇宙のフラクタル構造の中の一部として位置づけなおすこととなります。そこではじめて 観音様が般若波羅密多の深い行の中で照見されたように 初期仏教の世界は生まれ変わり 五蘊というフラクタル構造全体の その一部として肯定されることとなります。

即ち 般若波羅密多とは 五蘊の世界を宇宙のフラクタル構造の全体として捉えて そのまま全肯定する教えなのです。

そしてそれはそのまま 次の【第七節】の般若波羅密多の「行」として位置づけられることとなります。

#### 【観音様から見た五蘊の世界】

観音様からは皆空と観える世界であっても 人間からは善と悪の対立や神と悪魔の対立が有るように見えます。

ここで善と悪の対立と見えるのは 観音様から観れば それは深化の進んだ事象と深化の遅れた事象とが混在していて 直接接しているために その両者は対立のように見えているのです。

ここでの善悪の違いはフラクタル共鳴状態の深化の違いを言いますから 進化ではなく 深化と記述します。

それらは多様性と多層性の中に位置づけられていて その対立の存在自体は全肯定されています。

宇宙の中で 多様性を安定的に保つには 完全に均一に成らないように それぞれが濃度分布を持ち ある程度の独立性を持って 互いに交流しています。それぞれはそれぞれにふさわしい立場を確保することで フラクタル構造を作っています。

つまり 観音様からは常に様々な多層の段階のフラクタル共鳴状態が共存して見えていて 観音様自身は完全な最も深いフラクタル共鳴状態の中に居られます。そして しばしば観音様は衆生救済のために 敢えて他の下層のフラクタル層にも係わります。

従って観音様からは 「基本三特質」の二つ目の絶対性は 決して 善と悪としての二極的ではなく かといって 全て均一化された平面的にでもなく 必然的に多層化されたフラクタル共鳴状態にあると観えていることとなります。

つまり フラクタル共鳴は多層化されていて 過去も未来も含んだ永遠性という時間の大きな流れの幅の中で 共鳴状態にあるということとなります。

この観音様の見解が最も本質的ですが この多層性のフラクタル構造は常に絶対性と普遍性を表現しつつ 永遠性の中に深化を継続しつつ 全体としてのフラクタル共鳴状態を保っています。

さらに 一部分に着目しても 一部分のフラクタル共鳴の層は次のフラクタル層のフラクタル共鳴状態へと深化しつつ 流動していきます。フラクタル共鳴は流動の中にこそ本質があります。

そしてこの流動中には摩擦も当然発生します。(この問題に関

しては『般若心経を補強するPart 2』を参照のこと)

そしてさらに もしこの流動化する動きを留めようとする  
それはフラクタル共鳴状態にブレーキをかけることとなります。

しかし それであっても フラクタル共鳴は崩れずに その部  
分のみが単に下方のフラクタル層へ流動しつつ移行するのみで  
す。

そして五蘊全体としてのフラクタル共鳴状態は保たれながら  
しかも各層のフラクタル共鳴は密接に関連し合いながら 離合集  
散を繰り返しつつ より深層のフラクタル層へと移行していくこ  
ととなります。

## 【第七節】 悟りの方法

以無所得故

菩提薩埵 依般若波羅蜜多故 心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖  
遠離一切顛倒夢想 究竟涅槃 三世諸仏 依般若波羅蜜多故 得  
阿耨多羅三藐三菩提

続いて 「ここで否定された旧語句と旧経典には 悟りにとって 何ら得る所は無い」という理由で 以下に「悟りの方法論」を説きましよう。

地上に生きる修行者は これら旧語句と旧経典を破棄して 般若波羅密多に帰依したから 心に障りが無くなり 障りが無くなったから 明日を恐れる不安や恐怖が無くなったのです。

そしてさらに 遠離一切顛倒夢想として 空中と空外とのフラクタル共鳴から分離した受想行識のみの判断を遠くに切り離さなければ成りません。特に世にはびこる「実体が無い空」とするような 天地がひっくり返った 根本的に間違った認識の一切を捨てることです。

さらに 五蘊皆空として 宇宙のフラクタル構造の中で 自分の目の前に生じる全ての事象を・・・それが都合よく見えようと都合悪く見えようと その事象が今ここに存在することを必然と受け入れて 全肯定するのです。決して 悪と見えることをそのまま肯定するものではありません。

その悪と見える存在を必然として全肯定することが出来て 対処法も生まれてくるのです。

その対処まで含めて はじめて涅槃という悟りに達することができたのです。

そして 天上界の修行者 即ち 過去現在未来を同時に生きる三世諸仏は 般若波羅密多に帰依したことだけで 阿耨多羅三藐三菩提という 完全なる悟りを得ることができたのです。

地上界の悟りと天上界の悟りと 二つの悟りがあることになります。それは即ち 死後の世界が存在する事実を明確に示していることになります。ただし 順番から言えば 天上界が先に有って 次に地上界があると言うことになります。そして当然 両者はフラクタル共鳴にあることになります。

ところで 天上界といえど そこは「空中の存在」ではなく その外側の存在 つまり「空外の存在」なのです。ここはやはり『現象』と『事象』の世界ですから 般若波羅密多の「瞑想」と「行」により 自らの意志で悟りに到達することが求められるの

です。

天上界は「心の姿勢」が事象と現象を創る世界ですから 思考と行動が常に一致している世界です。この世界では 自らの意志により般若波羅密多に徹底して帰依することで一気に深いフラクタル共鳴に至り 阿耨多羅三藐三菩提という 完全な悟りを得ることが出来るのです。

そして ここは思考と行動が一致することから もし「実体が無い空」を信じていれば 観音様の救いの手が差しのべられるまで そのような実体が無い世界から抜け出られません。

また それが良いことであっても とらわれてしまえば そのことに強い信念を持って生きてしまい それが障害となって より先に 進めなくなります。

宗教も信念の塊となると よく見かける臭い宗教になります。この宗教臭さに対しては そこに「正しい苦の自覚」が必要なのです。

さらに 天上界であっても このように 般若波羅密多に到達するまでには様々な 障害が存在します。

つまり 直接的に般若波羅密多に帰依する意志がなければ 天上界といえど 決して「悟り」には至らないことを意味しています。

その点 この地上の体験を通して学ぶことは大きいのです。地上の世界であれば 般若波羅密多を知らなかったとしても それを知識として知る機会にも何度も遭遇します。そして 軌道から外れていても 何度も修正の機会に恵まれるのです。

何かを良いことと信じて 強い信念を持つことにより それが一時は大きな生きる力になります。強い信念を持って生きれば たしかに一時的に それなりの効果が有るのですが それはそのまま般若波羅密多ではないのです。

それはすぐに限界に達します。しかしそれが良いことだと思われていることだけに そこから出ることが かなり困難になります。

しかしながら そのようなときでも 地上の世界であれば 般若波羅密多を体得した指導者に出会い その人の一言で その壁を破って前に進むことも出来るのです。

さて 地上界で悟りを得るには【心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖】とありますが これは決して簡単なことではないのです。

この記述の中には修行の「本質的な意味」が見事に秘められているのです。

その最も本質的意味を示せば以下のようになります。

まず【心無罣礙】とは【第五節】で示された無色・無受想行識から始まる「無の修行」の中で 特に最後の「無意識界」に徹底

することを意味しています。

それは即ち 瞑想により**受想行識**の活動を極力低めて 意識を越える「行」の実践を意味するのです。

この「行」により 己の「心の姿勢」を見つめ続け 「心に一切の引っかかりを残さない【**心無罣礙**】」の状態に至ることができます。これも般若波羅密多の「瞑想」と「行」の一部です。

「**空**」の名称の由来とも成っているように これは心を空しくして**空**に至る修行なのです。

そして これまでの習慣的な思考による想念を積み上げてきた**受想行識**とは**空外**の「**色・受想行識**」であり 意識を一旦「無」にして到達する思考とは**受想行識**に依るのであり 本来の**空中**の「**色・受想行識**」であることになります。

本来 **色・受想行識**は自らの意志で**色・受想行識**の主導の下に入らなければならないのです。これには**色・受想行識**による徹底した判断の放棄と **色・受想行識**への帰依が必要です。

これは般若波羅密多の「行」の一つですが これを完璧にこなすことは なかなか困難であると知るべきです。

#### 【最も困難な「無意識界」の修行】

ここで **空中**と**空外**を強調して説明しましょう。この「無意識界」の「無」の「行」を成就するためには **空外**の「**色・受想行識**」に従属した意識の一切を切り離さなければなりません。肉の身をもつ人間の本来の姿はここにあるのです。

これは涅槃に至るための修行であり 指導者となるためには是非必要な 般若波羅密多の行なのです。

そのためには それなりの決意をもって「行」に臨まなければなりません。これには命をかけるほどの決意が必要なのです。

しかもこれは「何なにしたから悟れる」という「交換条件」でも ましてや瞑想の「技術」でもないのです。どんなに 本を読んで知識を得ても それは悟りとはまったく違うモノです。知識は確かにガイドには なりますが それ以上のモノではありません。

この修行を成就するには 日常生活においても 自分を捨てきり 徹底して誠実に生きるという 人間性そのものの力が問われる場面でもあります。

#### 【自らを呪縛する想念から開放され 涅槃に達する】

その上で ある程度の期間 徹底すれば一年二年間程度 思考を鎮め 想念を客観的に見て その想念を思考から切り離すのです。

これを「想念の切り離し」の「行」と呼びます。

この「行」で 長年蓄積した習慣の想念を自分から切り離すことができます。

そしてこの「行」の前提としては 「自分は既に 蓄積した習

慣の想念により 呪縛された状態である」との決めつけが必要です。さらに その決めつけが成り立つには「これまで 自分は想念によって苦しんできた」との強い自覚が必要です。そこまで達してからの「行」でなければ この「行」は まったく効果がありません。

自らの呪縛を切り離し 新しい思考の習慣が出来るまで 十年間はそれを強く意識して 続けなければなりません。

これまで自分を支えてきた あの強い信念さえも 今となつては無用の長物であると思えてきて 切り離しをしたいと思えてきます。

この「想念の切り離し」の「行」によって これまでの こびり付いた習慣的思考を一切切り離すことができるまでに成ります。

習慣的な思考とは 空外の「色・受想行識」による思考のことであり これはこれまで長年の 空中の「色・受想行識」の主導を無視して創り上げた「仮の自分」を一切捨て去ることを意味します。

ですから この「行」を実践するにはそれなりの覚悟が要るのです。そして それなりの覚悟無しにはこの「行」は 決して成就しないと知るべきです。

ここからは いつもの日常生活の延長では決して成就しない段階に入ります。その時機が来た人には それが出来るのです。

この「想念の切り離し」の「行」が出来たかどうか 悟りの分かれ道となります。涅槃と言われる境地には こうして達することが出来るのです。

どうしても出来ない人は まだその時機が来ていないと知り身の程をわきまえ 謙虚に生きるべきです。

この行を成就していない多くの人達は 相変わらず空外の「色・受想行識」のままに 怖いもの知らずで 立場を逸脱して 堂々と 思考を自分と信じて 思考のままに生きている人達なのです。

人間は空外の「色・受想行識」に生まれながらに縛られて生きてきた存在です。言い換えれば これまでは 空外の「色・受想行識」の配下に有り 真の自分である空中の「色・受想行識」を無いものとして 「仮の自分」を自分と錯覚して生きてきたのですから。

十年単位の期間 この「行」を徹底的に実践することで これまでの肉体にまつわる空外の「色・受想行識」に従属した意識を一旦切り離し そのことで「仮の自分」を切り離し やっと空外の「色・受想行識」の支配を打ち破ることができるのです。

そしてさらに 最も大きな障害と成っている「実体の無い空」



を排除できて初めて 本来の**空中**の「色・受想行識」主導の下での**空外**の「色・受想行識」に生まれ変わることが出来るのです。こうして 真の安心に満ちた涅槃の境地に至ることが出来るのです。そうして 見事に明日への恐怖は取り除かれます。

この「仮の自分」を一旦捨て去るプロセスを無くしては 真の悟りは存在しません。

「仮の自分」を真の自分と信じている限り 人間は苦しみ続けます。

「無意識界」の「無の修行」の最後には これらの現代の価値体系をも一旦リセットすることで 最終的に絶対普遍の価値体系に到達できるのです。

**空外**の「色・受想行識」の意識をいくら訓練しても **空外**の「色・受想行識」をいくら磨き上げてても 知識を詰め込んで その知識を切り売りして 人に教えることは出来たとしても そのことで悟ったつもりには成れても そこに悟りは一切無いのです。**空外**の「色・受想行識」は真の自分ではないからなのです。

#### 【空への帰還】

この「無意識界」のプロセスが非常に困難であるために 悟りはなかなか遠いのです。ましてや「実体が無い空」を抱えたままでは 悟りには永遠に到達することはないのです。

もしあなたが 中途半端に「無意識界」を修めて これでよしと思ってしまえば それがあなたの悟りの限界となります。滅多なことで「無意識界」を成就したなどというべきではないのです。

しかし般若心経が解読された現代はこれまでとは違います。この書を案内書として 世界観を知り その中での自らの立ち位置を見極めることができれば 涅槃に達することができます。

現代は多くの人がこの困難なプロセスを成就して 真の悟りを得て **空**へ帰還するときなのです。

さらにその過程で 人類としての**色**即是**空** **空**即是**色**のための活動が展開し そこに真の人類の恒久平和を創り上げるという時なのです。現代から未来にかけては 正にそのような時代なのです。

その時に至ったからこそ こうして般若心経は現代に蘇ったのです。

真の自分の**空中**の「色・受想行識」主導の意識にまで至れば 人間は自然に深いフラクタル共鳴へと導かれます。そこには全く新しい価値観が生まれてきて 人間はやっと苦しみから解放され

ます。

そうすれば 自らの生きる道も自然に見えてきて 人類の進むべき方向も見えてきて この真の自分の**空中**の「**色・受想行識**」主導の新しい価値観から 新しい行動原理が生まれてきます。

般若波羅密多の「瞑想」と「行」から生まれるこの新しい行動原理は人類をさらなる深いフラクタル共鳴へと導くこととなります。

そして多くの人の般若波羅密多の祈りにより 深いフラクタル共鳴に至り それによって独善的思想や虚無思想が淘汰され 独善の支配は終了し 虚無は消え去ります。

全ての民族が多層的に多層的に和合し 誰もが自他一体感に包まれ 個性豊かに 安心の気持ちを持続しながら 決して固定的ではなく 進歩と調和の中に流動的に展開して生きることが出来るようになっていくのです。この新しい行動原理によって世界の秩序は次第に形を作り始めます。

だからといって 無菌状態のような社会が出来るわけではありません。犯罪が皆無に成ることはありません。しかし そこに多くの人達のフラクタル共鳴があれば そのような人間の負の側面も 反面教師としての それなりの働きをするのです。

般若波羅密多の「瞑想」と「行」は フラクタル共鳴により 天上界と地上界が同期するように作用し 地上には恒久平和が築かれていくのです。

#### 【修行の両翼 般若波羅密多の瞑想と行】

地上界の修行者は「無意識界」に徹して 「**心無罣礙**」を保ちつつ さらに「行」を深めて**空**へ帰還し **空**の立場に立ち そこから地上界へと働きかけることとなります。

ここでは 「**心無罣礙**」として 一言で済ましてしまっていますが これはきわめて重要なところです。般若波羅密多の瞑想と「**心無罣礙**」の行は 修行の両翼で どちらも欠かすことが出来ません。

「**罣礙**」に対して「正しい苦の自覚」を持つことが「**心無罣礙**」の意味するところです。「**心無罣礙**」によって 修行の方向が明確に定まります。定まったその方向に 般若波羅密多の世界が深められ 成長していきます。

#### 【玄奘三蔵の境地】

玄奘三蔵は般若心経を見事に補足しています。この補足により般若心経はより完璧に成ったといえます。

玄奘三蔵の示した色即是空 空即是色は 般若心経を代表する境地です。

先に示した色即是空 空即是色は 瞑想により 一時的に空に戻り 又現実に帰ってくることでしたが ここで言う玄奘の境地とは 生涯をかけて 般若波羅密多の「行」を深めて 色 受想 行識を持ったまま 空に帰還し 空から現実世界に働きかけることを示しています。

【人間は本来空だから悟れる。空でなければ悟れない】

空は超実体であり 人間は本来 空の住人なのだから それができるのです。これが本来の人間の姿です。

だからこそ人は悟れるのであり もしも空が実体が無いのであれば 悟りそのものが実体が無いことになり 悟りの意味そのものを失います。つまり「実体が無い空」を否定したことに重大な意味があるのです。

般若心経が 色不異空 空不異色としてしめした生命観 即ち《人間の本质は宇宙の本质であり 宇宙の本质は人間の本质である》として示された本書の第三節こそ 人類に示された究極の解答なのです。

もしあなたが 「人間が考えることに意味がある」とするならば それは人間の本质は空であることを認めていることとなります。

ですから 「実体が無い空」では 考えることすら意味が無く 何事も始まりません。だからこそ遠離一切顛倒夢想なのです。

人間の本质が空ではなく 神によって創られたモノであるとか 唯物論的に進化しただけの存在であるとすれば この創られた頭脳で人間が何を考えたって そこに本質的意味は無いということになります。

そこにあるのはせいぜい進化の中で取得した 種の保存の本能に由来する好き嫌いや損得勘定ていどのもの ということになります。

これはチョット考えれば 誰にでもわかることです。

ここで フラクタル共鳴を意味する般若波羅密多とは これは 永遠性と絶対性と普遍性を基本とする価値体系に共鳴し 宇宙のフラクタル構造を縦に貫く変換自在なベクトルであると 意味を補強しておきましょう。

言い換えれば 人間は般若波羅密多の「瞑想」と「行」によって「空中」と「空外」とをフラクタル結合し さらに深いフラクタル共鳴へと導き 次元を超えて 宇宙の中を縦横に展開して生きる存在なのです。

## 【付節一】再定義の証明

以下に 般若心経における 色・受想行識・諸法が 般若心経編纂時に 新たに再定義された語句である事を証明する。

ここでは これらの語句の意味には関係なく 語句の配置と配列からのみ 数理論理的 (論理学の正式呼称) に「再定義」を証明できることに注目すること。

さらに 語句の意味には関係ないことから 「実体が無い空」であろうと 「超実体の空」であろうと 再定義は成立していることも重要です。

## 証明はじめ

色不異空から 色は空である。  
空不異色から 空は色である。

**[色 → 空]**

**[空 → 色]**

色であるためには空であ

ること  
が必要十分条件である。

従って 色は空と恒等的に等しい。

**[色 ≡ 空]**

・・・①本文の結論。

是諸法空相から 諸法は空相である。  
諸法であるためには空相であることが必要条件である。

**[諸法 → 空相]**

・・・②本文の結論。

一方 是故空中 無色・・・から  
色は空中に含まれない。

**[色 ∉ 空中]**

・・・③・・・本文の結論。

ここで空中とは 空と空相から成る。

## [空中 = 空 ∪ 空相]

・・・④  
本文の帰結。

① ② ③ ④より  
色は空中に含まれる。と同時に  
色は空中に含まれない。が成立する。

[色 ∈ 空中]

AND [色 ∉ 空中]

従って  
解は  
色は

色と恒等的に異なる。となる。

[色 ≠ 色]

従って ここで色は「初期仏教の語句」であるから  
色は「再定義された語句」でなければならない。

受想行識 亦復如是  
即ち 色は受想行識と同じで  
ある。

従って ここで受想行識は「初期仏教の語句」であるから  
受想行識は「再定義された語句」でなければならない。

次に 諸法については  
同様に 空中は空と空相から  
なる。

・・・④から  
諸法は空中に含まれる。

# 諸法 ∈ 空中

一方 是故空中・・・無・・・法 であるから  
法は空中に含まれない。

# 法 ∉ 空中

・・・⑤・・・本文の結論。

②と⑤から  
諸法は空中に含まれると同時に  
法は空中に含まれないが成立する。

# [諸法 ∈ 空中]

# AND [法 ∉ 空中]

従って解  
は 法と  
諸法は恒  
等的に異なる となる。

# 諸法 ≠ 法

従って ここで法は「初期仏教の語句」であるから  
諸法は「再定義された語句」でなければならない。

以上で 色・受想行識・諸法は再定義された語句であることを証明した。

証明おわり

## 【第八節】般若波羅密多の効能

故知般若波羅蜜多

是大神呪 是大明呪 是無上呪 是無等等呪 能除一切苦

故に ここに示した般若波羅密多の呪文は 大きな靈力のある真言であると知りなさい。

偉大な明知の真言であると知りなさい。

この上ない真言であると知りなさい。

比類の無い 真言であると知りなさい。

この呪文を唱え 行ずれば 一切の苦が効果的に取り除かれます。

ですから 般若波羅密多と唱えることが般若波羅密多の瞑想と行の一部なのです。

### 【呪文は暗号である】

編纂の段階で 般若波羅密多の真言を 緻密な論理で 極限にまで高密度に記述したものが「呪文」なのです。

「呪文」とはまさに時代を越えて保たれる論理性に満ちた暗号であり 靈力のある暗号であり 智慧に満ちた暗号であり 仏教を再生させる力のある暗号であると言えます。

そしてこの呪文には 積極的にフラクタル共鳴を生み出す力があるために 一切の苦を取り除く方法と力が秘められています。それは即ち ここに示した般若波羅密多による瞑想と「行」により 「心無罣礙」となることで 人間の精神の内面的自由性を阻害している障害が取り除かれることで 生命活動の自由性を獲得し その結果として 運命の困難から来る苦厄も取り除かれます。

それ故に 般若心経は現代へのメッセージと言えるのです。

一方 この暗号は長い間解読は出来なかったとしても この語句の配列と論理の中に般若波羅密多の真実は極限にまで圧縮されていて 整然と表現されていて フラクタル共鳴のエネルギーを発しつつ 存在し続けているのは明らかです。

それ故に 般若心経は常にフラクタル共鳴の強いベクトルを発し続けていたのです。その証拠が般若心経の持つ靈力です。そこ



で「真実不虛故」に続きます。

【特別の効能】

だからこそ表面的には意味不明であっても 般若波羅密多の真言は特別の靈力と知恵と比類の無い 特別の効果を持っているのです。

言い換えれば 般若心経は宇宙のフラクタル構造を記述し フラクタル共鳴に至る方法を説いたものですから 読む人がその意味を理解できなくても 文字列や音声そのものがフラクタル結合しているために そこに深いフラクタル共鳴を生じさせる力が有るのです。

ですから 般若波羅密多と唱えることが既に般若波羅密多の「行」の一部なのです。

そうであると知りさえすれば この特別の効果は納得できるものであり 誰もそこに疑いは持たない筈です。

このような際立った効果こそが 宇宙のフラクタル構造にフラクタル共鳴する真実を示しており 般若波羅密多はフラクタル共鳴そのものである証でもあるのです。

そしてここで 振り返ってみれば あなたが今 この書に導かれ 確かに触れたこと そのことが既に般若波羅密多の証ではないでしょうか。

如何に意味不明であっても 人々は体験的にその効果を知り その靈力は人々を魅了し 般若心経が特別の經典であると信じて大切に扱い 歴史の中を生き延びてきた奇跡の最大の理由なのではないでしょうか。

さて 般若心経が未だ解読されていない段階として さらに説明を続けます。

そこで・・・

## 【第九節】二千年後へのメッセージ

### 真実不虛故 説般若波羅蜜多呪 即説呪曰 羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶 般若心經

ここに示した般若波羅密多の真言は 暫くは解読できない時代が続きますが ここには真実そのものが厳然と表現されているのです。これは決して虚偽ではないのですから いずれ明らかになるであろうこの真言の結論を要約して示します。ここに示した結論の真言は深いフラクタル共鳴を発生します。封印が解けたときにはこの「真言」に従いなさい。

この 要約の真言の部分に関して 玄奘三蔵は漢語に翻訳せずに 敢えてサンスクリット語をそのまま漢語で音訳しています。それには暗号としての意味が 未だ明らかになっていない段階での 工夫が為されているのだと思われまます。

「羯諦羯諦」とは それはサンスクリット語で意味を確認すれば 「行く事よ 行く事よ」(文献一)となります。「行く」とはどこへ行くのか。それは空に行く以外に考えられません。即ち色即是空を實踐することの意味です。そして当然 その後に空即是色を實踐することに成ります。

そこで著者は それを現代語で表現しようと試みました。

暗号が解読された現時点で十分な意味を持つように 特に現代において深いフラクタル共鳴を発生する「真言」として ここに記述しておくことにします。

般若波羅密多の瞑想と行により 空に至れ  
そして空の中から現実世界に展開せよ。  
空の中から 《宇宙の理念》を實踐せよ。 悟りを得た者達よ。

最終的に般若波羅密多の結論を 単純な呪文としてここに示しました。

この呪文の意味も 般若心經が解読できない限り 不明のままの時代が続きますが この呪文として示した文言を含め 他の6個の般若波羅密多の語句も この經典の中ではフラクタル共鳴の関係にあり その經典の中でエネルギーを発生し続けています。何とも念の入った記述かと驚かされます。

最後に いずれ未来において般若心経が解読された時のために  
実践すべき行動を呪文の中に強く指示して 般若心経はここに終  
了することになります。

前節までの修行によって 生涯をかけて色即是空を極め 「無意  
識界」の修行を成就し 悟りを得て空にいたり 今度は空即是色  
の立場から 現実世界に働きかけることを強く指示して 般若心  
経の結論としているのです。

これがまさに 「絶対性と普遍性を確立して 人類の恒久平和を  
実現せよ！」との現代へのメッセージなのです。そしてこれが仏  
教再生の意味でもあります。

#### 【大本から読める歓喜の状況】

「大本・般若心経」の最後の場面は以下の通りです。

この瞑想の場に列席していた一同は 観音様が説いた壮大な宇  
宙観と永遠の命を持つ生命観に触れたことで 心から感動し こ  
れを歓喜をもって受け入れたのです。

般若波羅密多そのもので在られる仏陀は 「これはご自身の悟り  
による見解と完全に合致する」と語られ これを承認したのです。

これは確かに架空の設定ではあるのですが 瞑想の場に列席し  
ていた 全ての人々の感涙と わき上がる歓喜に満ちたこの場の  
雰囲気は 時を越えて 現代にまでそのまま伝わってくるよう  
でさえあります。

そして私達現代人も 今ここに二千年の時を越えて解読された  
般若心経に触れさえすれば 心底感動しないでは居られない す  
ばらしい真理の展開と内容です。

つまり この舞台設定は現代の今の状況の比喻であり 決して  
架空では無いことが分かります。

般若心経の真実に触れて 初めて分かることは 大乘仏教とは  
歴史を通して伝わってきた仏教の持つイメージとは大いに異なり  
まさに人間讃歌そのものであったのです。

般若心経の真実を知った私達は 歓喜の宴の中にあり これは  
現実のものであります。ここに描かれた歓喜の様子はまさに現代の私達  
のことであり 心からの感謝にたえません。

これこそが 仏陀入滅後に混乱した仏教の再生を願い 新たに  
興した大乘仏教の真髓を纏めた 般若心経なのです。

今ここに 仏陀の真意が明らかになったことで 末法の世は終  
焉するのです。

以上

## 結び

ここに 壮大な宇宙観と悟りの方法を示しました。般若心経の示す宇宙観は壮大です。これが大乘仏教の本来の思想です。

現代に伝わる大乘仏教の各宗派は その世界観の一部分を確かに引き継いでいると思われませんが 般若心経で否定された小乗仏教を一部残したまま 世界観のすべてを明快に示せていないので そこには大きな矛盾が残ったままと成っています。

今そこに有る 混乱した仏教は そこに明確な世界観は無く 仏陀入滅後 多くの人が係わったため 既に一貫した思想体系ではなく バラバラであるため 説く人によって皆違います。それはちぐはぐであり 継ぎ接ぎであり 寄せ集めであり 従って 故意に その中の幾つかを選択的に集めれば 何でも言えてしまうような 実に混乱した状況です。

### 【空こそ 個と全体が調和する道である】

多くの仏教宗派は他の宗派に対してかなり寛容です。現代に伝わる 華嚴経や法華経では 人間の中に完全性を見ているから 「実態が無い空」がはびこる中で 実に貴重な存在であるといえます。しかしその中には 人間に内在する完全性を強調した結果 独善が強烈になり 実に非寛容で 普遍性を欠いてしまったものも有ります。そしてその非寛容の事実こそが 世界観を正しく説いていない証拠なのです。

しかしながらそれだけでは 空を曖昧にしたり 空の普遍性を無視してしまうことによる 看過しがたい 致命的な問題が発生することになるのです。

このとき人間の中の絶対性は 他の人間の中の絶対性と対立してしまうことになり 独善が発生します。どちらも独善のまま絶対性を主張することから 互いに対立を解消することが出来なく成り 対立したまま相対化してしまいます。

そしてこの延長上に宗教の対立が有ります。これは大いなる矛盾なのです。

それぞれの立場で 互いに非寛容になってしまおうというのが現状なのです。これでは 絶対性を強調したことで 普遍性を失ってしまったことになります。

仏教のみならず 世界の多くの宗教の対立はそのすべてが 言葉はどうあれ普遍の存在としての 空の存在の重要性に気づかないことに起因しているといえます。

私が会った人の中には 「世界観など無くても 信仰は保てる。愛があれば世界観など必要ない」という人も居ました。

しかし 自分の世界をチョット広げると 世界観がなければ 愛さえ保てない場面が沢山出てくるのです。特に現代においては そうなのです。

特に世界の恒久平和を希求する現代においてこそ 空の存在に裏打ちされた世界観がきわめて重要になります。

即ち 人類の恒久平和においては 複数の文化や宗教が独善を捨てることで普遍性を回復し それぞれがそれぞれの立場を確立することで多層化し その中に多様性を保つことを求めなければ成りません。

この般若心経を正しく理解すれば 正しい不動の世界観が確立し 現代まで伝わった大乘仏教の各宗派の教えは画竜点睛を得て 生まれ変わります。そしてそのときこそ 仏教再生が成就したときなのです。

これは著者による般若心経の解説であります。この内容は私の半世紀近くに及ぶ修行の体験と完全に合致しています。私の修行の体験については その一部を拙著「人間やりなおし」に示しました。

ここで一旦否定された初期仏教に意味を見いだすとするならば 仏教とは深化する宗教であるということでしょう。

次第に退化していく宗教が殆どと言える中で 二千数百年の時間をかけて 仏教再生まで成し遂げたと考えれば 仏教は今後も深化する事が期待されます。そのような仏教は混迷する現代から未来にかけて明確な回答を与えるすばらしい宗教に成り得ると思います。そしてそれをするのは般若心経を解説して 仏教再生の道を示したこの私ではなく 仏教徒の仕事であると私は思っています。

#### 【般若心経は世界の思想をその内に含む】

般若心経が普遍性を確保することに徹していることは 先ず何よりも 教えの中心に教祖をおかずに 教祖を信仰の対象とはしていない事でしょう。

さらに宗教に有りがちな事項である 病気の治癒とか 運命改善とか そのために為すべき善行為とか 戒律とか 様々な禁止行為とか そのような救済に直接関係する事項は一切記述されていません。

このように 般若心経はここまで厳密に普遍的な世界観を説き その下に仏教再生の原理を説いているのですが これを体得するには かなりの論理思考とそれなりの修行を必要とし しかも 表向きには 情緒性は隠されているので 一般的ではないと言えます。

そこで 実際の衆生救済に関しては 宗教関係者の中で 般若心経を理解し 真摯に宗教再生を求める かなり上根の人達が力を合わせて 自ら係わる宗教を再生し これから再生するその宗教の中で 衆生を救い上げることになるのです。

私は 論理性に徹した般若心経の中に正しく情緒性を読み解き ここに秘められた「深い愛」と「片寄らない平和」を正しく受け取りました。

般若心経は情緒的表現を押さえ 宗教を成立させる基盤となる 宇宙の構造と 宇宙と人間の関係を緻密な論理で説きつつ 宗教再生を促しているのであり それ故に 現代に於ける般若心経の存在意義は巨大なのです。

ここに解説された般若心経が仏教再生を果たしている事は既に明らかですが 真理は一つですから 宇宙の構造と 宇宙と人間の関係が明らかになったと言

うことは プラトンに始まる西洋哲学と その後の混乱した世界の宗教の再生をも 同時に示していることになるのです。

つまり 世界の多くの哲学や歴史上の宗教に関して そのすべてをこの基盤となる宇宙の構造の中に吸収できるということなのです。

さらに言及すれば 般若心経の世界観はどこまでも普遍的であるが故に 他の世界から訪れる宇宙人に対してであっても 十分に通用する真理であり そのことは特筆すべきことです。

#### 【観音様が切り開いた五蘊皆空の道】

私達人間は この地上界で 肉の身を持って修行しています。この与えられた環境で般若波羅密多の瞑想と行を積むことで フラクタル共鳴に達することが出来ます。

ところで 瞑想は誰にでも出来ます。しかしながら それだけでは行深般若波羅密多とは成りません。どうしても深まらず 浅い所を漂うこととなります。

般若波羅密多を深めるためには 「行」としての「正しい苦の自覚」が必須となります。

覚者が簡単に世に出てこないのは この「正しい苦の自覚」の行がきわめて困難であるからです。

これは技術ではありません。ここは正直さ 素直さ 誠実さが問われる場面です。

両翼のバランスのとれた修行 即ち「正しい苦の自覚」と瞑想により 観音様の切り開いた 究極のフラクタル共鳴の状態を以下に示しておきます。

そしてそれは観音様だけのフラクタル共鳴ではなく 観音様が切り開いた道筋を辿っていけば 我々人間もそこまで達することが出来るのです。

般若心経には一文字の無駄もありません。観自在菩薩行深般若波羅密多ですから 観音様が到達したフラクタル共鳴の状態とは 単なる般若波羅密多ではなく 「行深」なる般若波羅密多であることを示しています。

観音様は「正しい苦の自覚」と瞑想によって 五蘊皆空まで達したのです。

ですから 「正しい苦の自覚」と瞑想が修行の基本であり これは修行の両翼です。片方が欠けては大きくバランスを失い 行深に達しないのです。

「行深」に達するには 瞑想だけしていれば良いのでは有りません。般若心経を構成する緻密な理論を理解し その世界観の下に 真摯に修行を重ね 日々の生活を精一杯生きるのとなければ わざわざ肉の身を持って この地上界で 生きている意味がありません。

現実世界での努力を惜しまず その体験の中で「正しい苦の自覚」を深めつつ フラクタル共鳴を体験し その積み重ねの中で その理論さえ忘れて 語句さえ忘れて フラクタル共鳴そのものに身を委ねて 今を生きるのです。

日常生活での努力を惜しまず その体験から 語句や論理に頼らない フラクタル共鳴そのものを体感しなさい。そこに 最も普遍的な《空》が実在するので

す。

### 【仏教再生は世界の宗教再生である】

仏教再生の後の 世界の宗教再生のためには そこまでの《空》の体得が必要です。それは最も普遍的な《空》に達することを意味します。これは究極の色即是空です。

現代に蘇った般若心経を理解した人々は 仏教再生 宗教再生を成し遂げ さらに最終目標としての人類の恒久平和を実現するために 《空》の中から 「正しい世界観を基にした 個と全体を調和させる行動原理」を生み出さなければ成りません。そしてこれが 究極の空即是色です。

これは般若心経を理解し 仏教再生を理解した人々の使命なのです。

### 【人類規模のフラクタル共鳴】

深められたフラクタル共鳴の中で 多くの指導者が生まれ育ち 観音様が切り開いた行深般若波羅密多を学び 人類は次第に《宇宙の理念》に共鳴し 絶対普遍の価値体系に共鳴し いよいよ《宇宙の理念》がより具体性をもって地上に投影されてきます。

多くの人々が深いフラクタル共鳴に至れば 宇宙のフラクタル構造を通して交流し 共鳴し合います。

無意識の行動や直感が深いフラクタル共鳴の中で 共通の理念の下に作用し合います。そこには深いフラクタル共鳴による 守護の神霊に導かれた真の共時性が現れて 人々をつなぎます。

人間の営みの一切が 深いフラクタル共鳴の中に統合されていくことで世界の恒久平和が実現されることとなります。ただし ここで忘れては成らないことは 物体や形式でフラクタル共鳴を求めようとする と 普遍性が得られないために 混乱も発生するということです。形式は部分的で 一時的で あくまで仮のモノでなければなりません。ですから どこまでも普遍的な精神性のフラクタル共鳴を重要視すべきなのです。

おわり